



一般社団法人COMHCa 創立記念イベント

2023年4月9日(日) online

記念シンポジウム「メンタルヘルスにおける対話」:

システムづくりと対話

ACTとOpen Dialogueから学んだことを活かす

一般社団法人COMHCa 共同代表

下平 美智代

Michiyo Shimodaira, Ph.D.



現在の関心

対話の場をつくる(語り聴くミーティングなど)
その場が成り立つ仕組み = システムをつくる

話題にしたいこと

1) システムづくり

2) 「対話の場」とは

ACTやOpen Dialogueが生まれたきっかけ

精神科医療の脱施設化・長期入院者の地域移行

ACT (Assertive Community Treatment)

包括型地域生活支援プログラム

1970年 アメリカ ウィスコンシン州
メンドータ州立病院
退院支援プログラムがうまくいかない
スタッフの話し合い
バーバラ・ロンツの支援+チーム支援の構造
重い慢性の精神疾患をもつ人を医療・保健・福祉一体となったチームが病院ではなく、町のオフィスを拠点に24時間体制で支えるアウトリーチ支援のプログラム

Open Dialogue

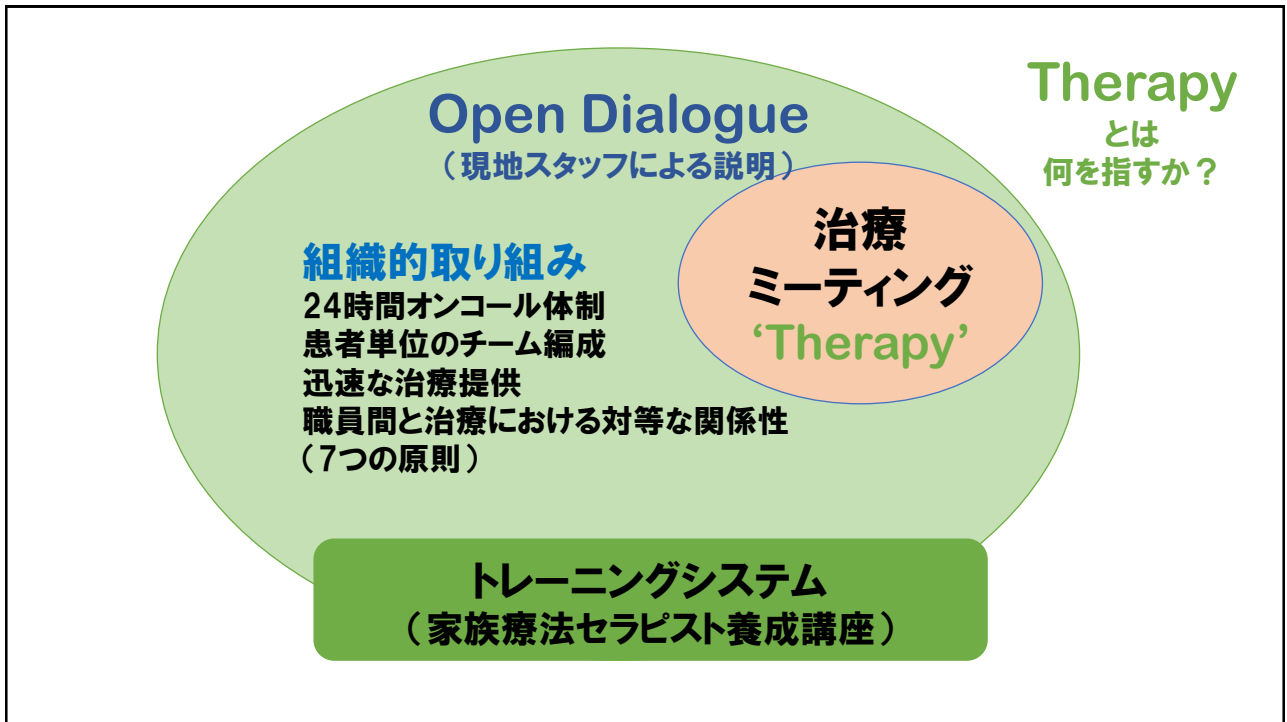
1984年 フィンランド トルニオ
ケロブダス病院の長期入院の患者の
治療の見直し、退院支援から始まった
病院の多職種チームで話し合い・勉強会
患者の話を聴く・家族を呼んで家族の話しも聴く
その地域で唯一病床をもつ公立病院なので、
急性期の治療を担う病院としての取り組み
24時間の相談電話→まず治療ミーティングをする

初発の統合失調症圏の患者さんを5年間前向きに追った 研究では予後がよい(76%が就労・就学していた)・・・ それはなぜ？

オープンダイアログ 7つの原則

1. 迅速な治療提供→24時間以内にミーティングを開く
2. 家族などその人のネットワークを含める
3. 柔軟性と機動性(アウトリーチする・相手に合わせて動く)
4. 責任(緊急電話を受けた人が最後までコーディネートする)
5. 心理学的連続性(同じスタッフが継続的に関わる)
6. 不確かさに寛容であること
7. 対話主義

Seikkula, et al. (2006)



治療的会話

Anderson & Goolishian(1992)

訳 野口裕二, 野村直樹

対話的視点に立った治療プロセスをわれわれは治療的会話と呼ぶ。治療的会話とは、「問題」についての対話を通じて、理解や発見を共同で探索してゆく努力のことである。セラピー、つまり治療的会話は、「その場でその人とともに」進行するプロセスを必然的に伴う。そこでは、「相手に対して」語るのではなく、「**相手とともに**」語り合う。こうしたメカニズムを通して、セラピストとクライアントは、新しい意味、新しい現実、そして、新しい物語を共同で開発する。**治療者の役割、専門性、そして、力点**は、自由な会話の領域を開拓し、「新しい何か」が生じるような対話プロセスの発生を促進することにある。

治療的会話

Tom Andersen(1992)

訳 野口裕二, 野村直樹

自分や他者との「対話」が自分を知っていく道筋である。われわれが使う言葉が、その時その場でのわれわれの自己を形作っていく。この視点を最初に臨床に取り入れたのが、アメリカのハーレーン・アンダーソンとハロルド・グーリシャンである。新しい言葉に出会い、新しい意義を見つけ出す事は、**自分にとっての新しい自己に近づくことである**。治療的会話とはこの探索の一形式であり、新たな記述、新たな理解、新たな意義、新たな言葉の含み、そして最終的には新たな自己の定義へのつながる探索である。

治療的会話の癒しの要素 Seikkula & Trimble(2005)

訳 久野恵理

急性期の状況では、ネットワークのメンバー(患者やその家族)は、しばしば、問題に飲み込まれ、狭められた仕方では、その問題を理解し、コミュニケーションすることが出来なくなっているかもしれない。

治療ミーティングでは、チームのスタッフは、全ての人の発言を注意深く聞き、**敬意をもって応答する**。また、チームスタッフは、ネットワークメンバーが**感情をあらわすようにサポートする**。スタッフ自身も、一人の人として、包み隠さず、本心からの応答をする。ネットワークメンバーの感情によって心が動かされたことを包み隠さないているためには、スタッフは、ミーティング中に起こる**強い感情に寛容である**ことが課題になる。ネットワークメンバーの前で、スタッフ同士の会話をすることは、リフレクティングチームの機能を果たし、ネットワークメンバーが、自分たちの経験を理解する可能性を拡大する。治療初期の段階では特に、極度のストレス状況における、先行きの見えなさに寛容になれるように、**何かを決めることよりも、会話の奥行きと幅を広げることを優先させる**

私の持ち場で

これを行うために
続けるために
どのような
仕組みをつくるか？

対話の場＝
‘相手と共に
語り合う’場

土台：Anderson, Goolishian,
Andersen, Seikkula, Mead, 禅

引用文献

- Andersen T (1992)(マクナミー, ガーゲン(2014):「リフレクティング手法」をふりかえって. In ナラティブセラピー, pp81-82. 金剛出版.)
- Anderson H, Goolishian H (1992) (マクナミー, ガーゲン(2014):クライアントこそ専門家である—セラピーにおける無知のアプローチ. In ナラティブセラピー, pp49. 金剛出版.)
- Bond GR, Salyers MP(2004). Prediction of Outcome from the Dartmouth Assertive Community Treatment Fidelity Scale. CNS Spectrums 9(12); 937-942.
- Seikkula J, Aaltonen J, Alakare B, et al(2006): Five-year experience of first-episode nonaffective psychosis in open-dialogue approach: Treatment principles, follow-up outcomes, and two case studies. Psychotherapy Research, 16(2); 214-228.
- Seikkula Y, Trimble D (2005) Healing Elements of Therapeutic Conversation: Dialogue as an Embodiment of Love. Family Process 44:461-475.
- 下平美智代(2015)さらに見えてきたオープンダイアログ フィンランド、ケロプダス病院見聞録. 精神看護18(2); 106-122.
- 下平美智代(2018)初心者がアウトリーチをどう始めるか精神科臨床サービス18:386-390.